

事象の視認性は推測課題時の虚偽申告に影響するか？

○劉歆緒¹・井山田祐樹²

(¹九州大学大学院人間環境学府・²九州大学基幹教育院)

目的

ヒトが金銭を獲得するために嘘をつくこと(以下は「不正行為」と略す)は珍しくない。照度の暗い環境がこのような不正行為を促進することが複数の研究で報告されてきた(劉・山田, 2022; Zhong, Bohns, & Gino, 2010)。Zhongらは暗さが参加者の主観的な匿名感を高め、不正行為を促進すると説明したが、今のところその説を支持する証拠はない(劉・山田, 2022)。Zhongらの匿名感説は環境の「視認性(visibility)」という特性に依存する。だが Zhongらは、不正行為の遂行者への視認性(すなわち匿名感)を強調したが、事象自体の視認性を考慮しなかった。つまり、暗条件の参加者は課題の結果が誰にも観察されにくいと考えたために、不正行為を行なった可能性がある。従って、本研究では事象の視認性の低下が不正行為を促進するという仮説を検討した。

方法

実験参加者 検定力分析の結果に基づき、実験では Yahoo!クラウドソーシングで 176 名(男性 73.86%, 女性 25.57%, 無回答 0.57%)のデータを収集した。平均年齢は 47.2 歳($SD = 10.9$)であった。**課題と手続き** Fischbacher & Heusi (2013) の不正検知課題を修正して用いた。具体的に、ランダムに一角のみが消えたひし形を画面に呈示した。参加者はひし形が表示される直前に、どの方向の角が消えるのかを予想した。10 試行のうちで予想が正しかった回数を参加者に自己申告してもらい、それに応じて賞金を支給した。参加者の自己申告された成績をチャンスレベルと比較し、不正行為を表す指標として使用した。

参加者はランダムに実験群と統制群に分けられた。課題結果の視認性を操作するために、視覚マスキング(visual masking)の手法を使用した(Enns & Di Lollo, 2000)。実験群の課題結果の呈示時間は 50ms で確認がしにくい一方、統制群の呈示時間は 1000ms で、課題結果を容易に確認することができた。参加者は推測課題を遂行した後、Attention Check Question と課題結果確認の困難さの質問に回答した。以上の内容は Open Science

Framework (<https://osf.io/ju9ah>) に事前登録された。

結果

実験群の結果確認の困難さは統制群よりも高かった($t(174) = 8.18, p < .001, d = 1.23$)。不正指標については、実験群($M = 4.03$ 回)は統制群($M = 5.10$ 回)を上回らなかった(片側 Welch's $t(168) = -2.42, p = .99$, Cohen's $d = -0.365$)。両条件間の不正指標についての同等性検定(SESOI: $d = 0.5$)の結果は有意ではなかった(両側 t 検定: $t(168) = -2.42, p = .017$; TOST Upper: $t(168) = -5.74, p < .001$; TOST Lower $t(168) = 0.898, p = .185$, equivalence bounds (raw scores): $\Delta_{Lower} = -1.46, \Delta_{Upper} = 1.46$)。実験群において「0 回」と報告した参加者は 27.3%を占め、統制群は 2.3%であった。また、両群の不正指標ともチャンスレベルを上回らなかった($p > .05$)。

考察

実験群と統制群における結果確認の困難さには実際に差があったものの、課題結果の視認性の低下が不正行為を誘発するという本実験の仮説は支持されなかった。むしろ、統制群の不正指標は実験群の不正指標より有意に高かったという仮説とは真逆の結果が得られた。つまり、課題の結果を確認できない時、参加者が報告した平均正答回数はより少なかった。実験群において、0 回と報告した参加者が多かったためである。しかし、課題結果を確認するのが困難であった故に、「0 回」を報告した参加者以外の全員が不正行為(成績を適当に報告した)を犯した可能性は排除できない。この場合、 t 検定での比較は不適切となるため、実験と分析の方法を再考する必要がある。

また、統制群の不正指標にもチャンスレベルとの有意差は見られず、不正行為が発生したと言えなかった。この結果は類似の課題を用いた先行研究の結果と相違する(Guo et al., 2020; 劉・山田, 2022)。課題の複雑さのため、参加者は課題に集中し、不正行為を遂行する機会を逃したか、今回の実験環境は参加者が不正行為を遂行できる適切な環境ではなかったのかもしれない。今後の研究はこれらの問題をより深く検討すべきだろう。